

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】小林 篤史

【所属】(助成決定時)京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

19 世紀における東南アジア域内交易の展開とアジア人商人ネットワークの役割

【研究の目的】

本研究の目的は 19 世紀における東南アジア域内交易の展開と、その発展にアジア人商人ネットワークが果たした役割を検討することである。先行研究は、19 世紀後半以降に、東南アジアは欧米とアジアの工業国に対し第一次産品生産・輸出地域として二重に周辺部化されたことを明らかにしてきた。しかし、これは東南アジア地域経済を植民地化や工業化の一面から捉えたにすぎず、実際には植民地化以前から起こっていた、イギリスの自由港シンガポール設立に伴う東南アジア域内交易の発展と、その担い手であるアジア人商人の活動については正面から議論されてこなかった。第一次産品輸出拡大の基盤とそのイニシアティブの所在を、19 世紀を通じた域内交易の視点から捉えなおすことで、地域経済発展の包括的評価が可能となるのである。本研究はこの課題について、主に西欧諸国が残した貿易統計、商業新聞といった実証データを用いて考察する。

【研究の内容・方法】

(1) 貿易統計分析

第一に、19 世紀の東南アジアにおける貿易統計を可能な限り収集・整理し、東南アジアの欧米遠隔地貿易、他のアジア地域(インド、中国、日本など)とのアジア間貿易、そして東南アジア域内交易を数量的に把握した。貿易統計は 19 世紀前半には英領海峡植民地と蘭領東インドに関してのみ利用可能であり、後半には英領ビルマ、仏領インドシナ、フィリピン、シャムの貿易統計が随時刊行され始める。そこで 19 世紀前半と後半で分けて分析を試みた結果、前半期には英蘭植民地を中心とした域内交易の成長とシンガポールの中心性が明らかとなり、さらに後半期には東南アジア全体の欧米遠隔地貿易とアジア間貿易の拡大が確認され、域内交易についてもシンガポールを中心としながら、さらに拡大傾向にあったことが統計的に把握された。19 世紀を通してシンガポールを中心とした域内交易は成長していたのである。

(2) 商品貿易統計と商業誌の分析

域内交易成長の原動力を探るべく、シンガポールの商品別貿易統計を分析した。19 世紀前半は主にイギリスから輸入された綿製品の再輸出と、それと交換に輸入される錫、砂糖、胡椒などによって域内交易は構成されていたが、後半期になると大陸部で生産された米の輸入とその島嶼部への再輸出によって域内交易は急激な拡大を遂げたことが判明した。つまり島嶼部の第一次産品生産に従事する小農や華僑移民の食糧需要に、シンガポールを中継して大陸部の米が供給されたのである。19 世紀後半以降、世界市場への第一次産品輸出の拡大は、大衆必需品を流通させる域内交易の発展に支えられていたのであるが、その担い手として 19 世紀前半からシンガポールで交易ネットワークを形成してきた仲介華人商人の存在が注目される。彼らは西欧商人と現地商人の取引を仲介することで富を蓄積し、その中から、バンコクに精米所を経営する陳金鐘たんきむんといった域内交易に活動基盤を持つ海峡華人が生まれた。19 世紀を通じた域内交易の発展において、前半期の商人ネットワークの形成は重要であったといえる。

【結論・考察】

本研究は貿易統計と商業新聞の情報を分析した結果、シンガポールを中心とした域内交易は 19 世紀を通して成長し、それが東南アジア第一次産品輸出の拡大を支えていたこと、そして 19 世紀前半から東南アジア各地をつなぐネットワークを形成してきた仲介商人が、米に代表される大衆必需品の域内交易を促進する重要な役割を果たしていたことを把握した。これら事実からは、従来の研究から想起される、19 世紀後半以降の植民地化やアジアの工業化が、東南アジアの第一次産品輸出拡大を引き出したというイメージとは異なる、現地商人の主導性の下、19 世紀を通じた域内交易の発展こそが第一次産品輸出拡大の基礎を提供したという新たな論点が導き出される。19 世紀における東南アジアの世界経済への参入過程は、植民地化や工業化といった外来のインパクトを重視するだけでなく、域内交易に代表される、現地の主体が主導する地域経済発展の側面から再考する必要があるだろう。